

2022年3月20日大斎節第3主日

出エジプト記 3章 1-15 節

コリントの信徒への手紙一 10章 1-13 節

ルカによる福音書第13章 1~9 節

3月16日の地震は、教会の建物・備品・敷地に損害はまったくありませんでした。ただし、東北の親戚や知人の方からの情報では、11年前の東日本大震災の時よりも部屋の内部の被害が大きく、いろいろなものが破損・散乱したとも聞いています。道路の破損や上下水道が止まったところもあり、しばらく生活が困難な地域も多くあります。一日も早い復旧と、平穏な生活が戻りますことを祈りたいと思います。

さて、本日の旧約日課は、「新共同訳聖書」に「モーセの召命」とある通り、モーセが出エジプトの指導者として、主なる神様に召される個所です。「燃えない柴」のお話も興味深いのですが、モーセが、「彼らに、『あなたたちの先祖の神が、わたしをここに遣わされたのです』と言えば、彼らは、『その名は一体何か』と問うにちがいません。彼らに何と答えるべきでしょうか。」(出エ 3:13)と尋ねたとき、主なる神様が、『わたしはある。わたしはあるという者だ』と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと」(出エ 3:14)と、主なる神様の名前が明示されるところが、有名でありまた重要です。モーセは、「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」(出エ 3:6)と、自分の部族の神様であることは告げられていたのですが、まだその名前を知らなかったのです。

この主なる神様の名前の箇所は、原文を英語に直訳すれば、「I am who I am.」と単純です。しかし、単純であるがゆえに翻訳が難しいところでもあります。「聖書協会共同訳」では「私はいる、という者である」となりました。古い「口語訳」では、「わたしは、有って有る者」、さらに古い文語訳では「我は有て在る者なり」となっていました。新しい訳で「ある」ではなく、「いる」となったのですが、いずれにしても「存在」にかかわる事柄がその名前に関係しています。主なる神様が、すべての存在の根拠であると言われる根拠でもあります。主なる神様は、天地を創造された方であるので、すべての存在の根拠であることは『聖書』において大前提です。しかし、この箇所は、モーセが、出エジプトという大きな解放の出来事の指導者として召し出される際に、すべての存在の根拠が名前である方が導かれると、初めて告げられたのです。それは、巨大な勢力であるエジプトを相手にしたとしても、恐れることはないと言ったモーセとイスラエルを励ますためでもあったのでしょう。

さて、この出エジプトの出来事は、イスラエル・ユダヤ人にとって信仰的にも

集団的主体性の確立においても大切な出来事です。パウロもそのひとりであり、パウロがイエス様の出来事について語る時も、そのことが基となっています。本日の使徒書も同じです。「兄弟たち、次のことはぜひ知っておいてほしい。わたしたちの先祖は皆、雲の下におり、皆、海を通り抜け、皆、雲の中、海の中で、モーセに属するものとなる洗礼を授けられ、皆、同じ霊的な食物を食べ、皆が同じ霊的な飲み物を飲みました。」(1コリ 10:1-4)と語りますが、パウロが、「ぜひ知っておいてほしい」と語っている内容は、出エジプトの出来事です。しかし、そこにはパウロなりの解釈があります。

「海を通り抜け」という記述は、明らかに出エジプト記14章の「葦の海の奇跡」を現していると思いますが、パウロは、そこに代表される出来事を、「モーセに属するものとなる洗礼を授けられ」とまとめています。もちろん、パウロは、祖先であるイスラエルの人々が、モーセに属するために洗礼を実施していたと思っていたわけではありません。「洗礼」という動作を象徴的に用い、出エジプトの出来事全体が、イスラエルがイスラエルとなる根拠となる出来事であったと告げているのです。次に「霊的な食物」「霊的な飲み物」と語りますが、パウロはここで、一般的な文字通り「食べ物、飲み物」を意味する言葉に、「霊的」という属性を加えて、出エジプト記の出来事には、イエス様を信じるようになってわかった、特別な意味を加えています。パウロにおいて「霊的」に対比されるのは「肉的」という表現です。そして、ここでパウロが想定されている「出エジプト記」16章にある「マナ」は、肉的な食べ物でした。パウロはそれを「霊的」な食べ物としたのですが、そのようにとらえることは、パウロが初めてとは言えません。「申命記」8章3節に「主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることがあなたに知らせるためであった」とある通り、『聖書(旧約)』にある物語自体にも、「マナ」は、通常の食べ物とは異なる霊的な意味があると解釈されていました。パウロは、それらからさらにイエス様と結び付けて敷衍させて、信仰を養う霊的な食べ物という意味を深めたのでしょう。パウロの霊的な事柄を深めた表現は、「皆が同じ霊的な飲み物を飲みました。彼らが飲んだのは、自分たちに離れずについて来た霊的な岩からでしたが、この岩こそキリストだったのです」(1コリ 10:4)で結論に達しますが、内容は少し疑問に思えます。ここでパウロが想定しているのは、「出エジプト記」17章1～7節、「民数記」20章1～13節にある「メリバの水」です。ここでの水も文字通り飲む水(肉的な水?)ですが、モーセと民を試みる霊的信仰的な意味を持つ水でもありました。パウロは、そこからさらに意味を深めて信仰を養う霊的な飲み物という意味にとったのですが、その水を出す「岩」が、モーセの一团に岩がついて行ったという記述はないからです。おそらく、パウロも「霊的な岩」と述べているので、「岩」が物理的に移動したとは考えていないと思われます。そして、「岩」から水を出させたメリバの水の

物語は、『聖書（旧約）』中で主なる神様が信じる人々を養う象徴として語られています（「彼らが飢えれば、天からパンを恵み、渴けば、岩から水を湧き出させ（ネヘミヤ 9:15）」、「荒れ野では岩を開き、深淵のように豊かな水を飲ませてくださった（詩 78:15）」、「主が岩を開かれると、水がほとばしり、大河となって、乾いた地を流れた（詩 105:41）」。「主が彼らを導いて乾いた地を行かせるときも、彼らは渴くことがない。主は彼らのために岩から水を流れ出させる。岩は裂け、水がほとばしる（イザヤ 48:21）」）。おそらく、パウロはこれらの信仰から、信仰者には水が出る岩が必ずついてくるように、主なる神様が信仰者を必ず養ってくださると考えたのでしょう。

パウロがここで出エジプトの出来事に触れる目的は、出エジプトにかかわった人を模範とするためではありません。むしろ、反面教師的にとらえることです。「しかし、彼らの大部分は神の御心に適わず、荒れ野で滅ぼされてしまいました」（1 コリ 10:5）と、出エジプトの出来事を歩んだ人の末路が、滅びであったと伝えるからです。イスラエルをエジプトの苦難から救おうとされた、主なる神様の御心は間違っていないのですが、それにイスラエルが答えられなかったのです。出エジプトを振り返った理由は、「これらの出来事は、わたしたちを戒める前例として起こったのです」（出エ 15:6）とある通り、イスラエルの歩みの何が間違っていたかを明確にすることです。そして、今、教会に集められている新しいイスラエルの歩みを、未来に向けて確かなものとするのです。そこから、コリントの教会への勧めとして、「悪をむさぼること」（1 コリ 10:6）、「偶像を礼拝しないこと」（1 コリ 10:7）、「みだらなことをしないこと」（1 コリ 10:7）、「キリストを試みないこと」（1 コリ 10:8）、「不平を言わないこと」（1 コリ 10:9）が告げられます。そして、「これらのことは前例として彼らに起こったのです。それが書き伝えられているのは、時の終わりに直面しているわたしたちに警告するためなのです」と語り、忍耐強く終末を待ち望むことを勧めているのです。

この時のパウロは、終末が近いと考えていたと思われます。その意味では、単純にここにあるパウロの言葉を普遍的に解釈することとはできないかもしれません。しかし、忍耐強く終末を待ち望むということは、コリントの教会の人々においてだけではなく、キリスト者の基本姿勢であると思います。ただし、パウロは、単に忍耐を呼びかけているだけではありません。「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずですが。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えてくださいます」（1 コリ 10:13）と語り、主なる神様が信頼できる方であり、信仰者に必ず導いてくださるという確信を示しているからです。「神は真実な方です」という表現の「真実」は、「忠実、信仰」とも訳せる言葉が用いられているのです。主なる神様が、「真実、忠実」であることも、存在の根拠であることと同じく、大前提のような事柄です

が、また忘れてしまう事柄でもあります。人間は、目の前にある事柄に目を奪われて、主なる神様の本質を疑い、試し、あるいは勘違いし、また忘れてしまうことがあります。そして、その時、人間の歩みは、先が閉じられた滅びの歩みになる。出エジプトの出来事はそのことを告げます。それゆえにパウロはここで改めて、大前提である事柄を語っているのです。また、キリスト者は、イエス様を通じた信仰によって、主なる神様を信じるとき、主なる神様が信頼できる方であり、信仰者に必ず導いてくださるといふ確信を持つのですが、それでも、厳しい試練がすべてなくなるわけではありません。そして、試練にあったとき、同じように大前提を忘れるとき、先が見えない歩みをしてしまうかもしれません。あるいは懸命に歩もうとしても、先が見えないと思えるかもしれません。しかし、パウロは、主なる神様は、耐えることのできる「逃れる道」を、主なる神様は供えてくださるといふ、別の確信を告げるのです。「逃れる道」は、今歩んでいる道とは異なる道を意味し、それゆえに「外に向かう道」、「別の道」、「勝利への道」などいろいろに訳すことができます。キリスト者は、イエス様を信じるがゆえに、イエス様を通して主なる神様から、そのような道を示されるのです。イエス様の十字架への道が、先の閉ざされた道のように見えても、そうではなかったからです。復活という勝利への道でもあったからです。パウロの確信は、ここに根拠があるのです。

パウロの時代、そして最初の教会の時代において『聖書』とは「旧約」だけでした。そこにイエス様は登場しませんが、パウロはそこに間違いが書かれていると思っただけではありません。また民族的信仰的祖先であり、主なる神様によって選ばれ、守られ、導かれて、最終目的地カナンの地に入るといふ救いを目指していたイスラエルの歩みが、すべて間違っていたと考えてもいかなかったと思います。パウロがイスラエルの歩みを振り返る理由は、彼らの間違いから学び、イエス様を通じた主なる神様への信仰によって、自分たちの歩みを深めることです。コリントの教会の人々、特に非ユダヤ人の信仰者にとって、『旧約』の人々は民族的祖先ではありません。しかし、信仰的な祖先です。パウロがここで『聖書(旧約)』を用いながら説明する理由もそこにあります。つまり、キリスト者は、主なる神様に選ばれた、信仰的な子孫なのです。そしてそうであるがゆえに、出エジプトにかかわった人々が、雲や海を通じて導かれたように、キリスト者は、イエス様を通じて導かれています。その導き手は確かな方であり、また信頼できる方です。それ故に、不安や人間的な思いで道を間違えないようにとパウロは勧めているのです。

戦争による悲しみ、不安や恐れがいまだ続いています。わたしたちの国では、地震という事柄によって、さらなる不安が加わっています。それらを単に試練という言葉で意味づけることはできません。しかし、信仰とは、それらの悲しみや、不安、怖れを抱かせる出来事を直視しつつも、それらを超えた主なる神様の導きを信じることです。その確信のもと、これからも歩みたいと思います。